

【インタビュー記録】

硫黄島民1世・川島フサ子さんのライフヒストリー

—— 幼少期の生活経験から戦時強制疎開を経て終戦まで ——

石原 俊 西村 怜馬
羽切 朋子 羽切 学

解題

1. 硫黄島の近現代史

硫黄島は東京都心から南へ約1,250kmの太平洋上にある、東京都小笠原村(広義の小笠原諸島)に属する島である。硫黄島は、小笠原群島(狭義の小笠原諸島)の中心である父島から南方約270kmに位置している。

硫黄島は、アジア太平洋戦争の終盤に激しい地上戦が行われたことで、広く知られている。また現在では、全島が自衛隊の基地となっており、一般住民の居住は認められておらず、入島も厳しく制限されている。

一方、硫黄島では、19世紀末に入植が始まって以来、約半世紀にわたって住民が生活を営んでいた歴史がある。だがその事実は、日本国内でもまだまだ広く知られているとはいえない。

20世紀前半の硫黄島は、糖業、続いてココ(コカインの原料)の栽培を軸とした、拓殖会社のプランテーション型入植地として発展していった。島民の大多数は、拓殖会社の小作人であった。農業だけでなく、漁業なども盛んであった。

しかし1944年6月、軍の要請を受けた東京都が、硫黄島に住む女性全員と16歳未満・60歳以上の男性の引揚命令を発した。島民の約9割が本土に強制疎開となり、約1割は軍属として島に残留させられた。後者の残留者の多くが、地

上戦によって犠牲になった。

地上戦後、硫黄島は長らく米軍占領下に置かれ、島民の帰島は拒まれ続けた。1968年、硫黄島を含む小笠原諸島の施政権が日本に返還されるが、日本政府は硫黄島に自衛隊を駐留させ始めた。本稿が刊行される2022年は、硫黄島民が強制疎開によって故郷を失ってから78年目となる。

本稿は、強制疎開前の硫黄島で生まれ育った、現在(2021年12月)92歳の女性のインタビュー記録である。1944年の強制疎開前の硫黄島で生まれたいわゆる島民1世は、現時点では少なくない方が存命している。しかし、1920年代～30年代に生まれ、強制疎開前の硫黄島での生活について明瞭な記憶をもつ島民1世は、残念ながららわずかとなってしまった。本稿が、近現代日本・アジア太平洋の周縁部で翻弄され続けてきた硫黄島民の歴史経験を、末永く継承していく一助になればと願っている。

2. 硫黄島の気候・生態

後述のインタビュー記録において、硫黄島での生活経験が詳しく語られるので、その背景知となる気候や生態について、事前に概観しておく必要があるだろう。

硫黄島は北緯24度45分、東経141度17分の北西太平洋上にある。年間の平均気温は25℃前後であり、夏季の最高気温は35℃以上に達する反面、冬季でも15℃以下になることはほとんどなく、年間を通じて雪や霜は観測されない。また、年間の平均降水量は約1,200mmであり、東京23区の約1,600mmと比べてやや少ない。

硫黄島は火山島であり、19世紀末の入植以降、火山活動がほぼ一貫して継続している。島内はもちろん、周辺海域にも火山性ガスの匂いが拡がり、地熱が高い地帯もある。

地形は、北東部の元山もとやまと南西部の摺鉢山すりばちやま(旧島民の間ではパイプ山とも呼ばれる)の2つの火山が海岸砂丘によってつながれ、ひとつの島になっている。全体としては平坦であり、島の最高峰の摺鉢山でも標高は200mに満たない。

面積は2020年時点で約24km²であり、東京都品川区と同程度である。だが火山活動による隆起が続いており、今後も拡大する可能性が高い(強制疎開以前の島の面積は20km²に満たなかった)。

硫黄島には河川がなく、井戸を掘っても海水の塩分と火山の硫黄分が混ざった水しか採取できない。そのため、真水は天水に頼る他なく、島民はさまざまな工夫を凝らして雨水を溜め、生活用水や農業用水を得ていた。

強制疎開前の植生は、タマナ、タコノキ、パイナップル、パパイヤなど、亜熱帯の植物が中心であった。また、防風林として家屋の庭にガジュマルを植えていたようである。

3. 全国硫黄島島民3世の会の成立とその歴史的背景

地上戦後、硫黄島を含む広義の小笠原諸島を占領下に置いた米軍は、小笠原群島(父島・母島など)の大多数の島民と、硫黄列島(硫黄島・北硫黄島)の全島民に、帰郷を認めなかった。このため1947年、小笠原島硫黄島帰郷促進連盟が結成され、帰郷運動を展開したほか、島民の資産保護・権利確保・生活援護といった同郷団体の役割を担った。

しかし、サンフランシスコ講和条約によって、小笠原群島・硫黄列島は引き続き米国の排他的な施政権下に置かれることとなり、島民の早期帰郷の可能性は遠のいた。多くの島民が生活困難にあえぐなか、当面の金銭的補償を求める声が高まり、帰郷促進連盟も米国政府と日本政府に対して補償要求運動を本格的に展開するようになった。その結果、1950年代から60年代にかけて、東京都・日本政府・米政府からの補償金(見舞金)が、帰郷促進連盟または島民世帯に支

払われた。だが、米政府からの補償金の配分方式をめぐって、特に硫黄島民の間で激しい対立が巻き起こり、1964年には帰郷促進連盟が分裂に追い込まれてしまったのである。

翌1965年、分裂した帰郷促進連盟のメンバーを一定程度統合しつつ、福田篤泰参議院議員を初代会長とする財団法人小笠原協会が設立された。小笠原協会は現在でも存続し、硫黄島民の当事者性に寄り添った活動を展開している。

1968年に広義の小笠原諸島(小笠原群島・硫黄列島など)の施政権が日本に返還されたが、小笠原群島の父島や母島の島民に対して約四半世紀ぶりに帰島・居住が認められた反面、硫黄列島の島民には前述のように帰郷が認められなかった。

こうした状況下で1969年、約200名の硫黄列島民が硫黄島帰島促進協議会を結成し、政府や都に対して帰島を求める陳情・請願を開始した。また1976年には、約150名の島民によって硫黄島旧島民遺族会も結成されている。

一方で1971年には、施政権返還前から日本各地に存在していた硫黄列島民の親睦会を組織して、全国規模の硫黄列島民の親睦組織である硫黄島同窓会が結成された。硫黄島同窓会は21世紀に入って全国硫黄島島民の会と改称している。同会は毎年9月の第2日曜日に、川崎駅前の川崎日航ホテルにおいて、年次総会と「島民の集い」を開催している。

この総会や集会は現在も、硫黄島に関係する情報を共有する機会や、島民の憩いの場としての役割を果たしている。硫黄島で暮らしていた島民1世はもちろんのこと、その子孫(2世・3世)や硫黄島関係者も、硫黄島に想いを馳せる時間を楽しんでいる。2021年9月には、第50回が行われた。

また新たに2018年、全国硫黄島島民3世の会が発足した。この会は主に、島民1世を祖父母に持つ孫の世代で構成されており、2021年12月現在、会員数は35名ほどである。

全国硫黄島島民3世の会は、かつて存在した硫黄島における生活経験や、強

制疎開の経験、故郷を失った島民たちの戦後の生活経験を、克明に記録すべく、島民1世のライフヒストリーを聴き取るプロジェクトに着手している。本稿は、その最初の成果のひとつとなるだろう。

4. 川島フサ子さんの人物情報

川島フサ子さんは、1929年(昭和4年)5月22日、硫黄島東部落に生まれた。旧姓は水口である。2021年12月現在、満92歳となる。

フサ子さんは、父・清次郎と母・きくの中に、9人兄弟の3番目として生まれた。きょうだいの構成は出生順に、長男の鬼和男、次男の鬼志男、長女のフサ子、三男の清四郎、四男の藤五郎、次女の光子、三女の法子、四女の底子、五男の末明であり、フサ子さんは長女にあたる。

フサ子さんの母方の祖父、荒井多作は千葉県銚子に生まれ、母島に渡った後、1890年頃、開拓が始まったばかりの硫黄島に渡っている。荒井多作はその後、銚子に残していた妻ハルと娘2人を、硫黄島に呼んでいる。この娘2人のうち1人が、フサ子さんの母・きくである。フサ子さんの父・清次郎は、母島に住んでいたが、その後硫黄島に渡り、西部落の笹本家で家業手伝いをしていた。

フサ子さんの祖母・ハルが清次郎を気に入り、娘のきくと結婚させた。ハルは清次郎を婿養子にしたかったようだが断られ、きくは水口姓を名乗ることになったが、ハルは土地等すべての名義を清次郎に変え、清次郎・きく夫婦の家の隣に屋敷を構えた。夫婦は主に農業を営んでいたが、清次郎が石切技術を持っていたため、島の墓石等の製作にも従事していた。フサ子さんは、清次郎・きく夫婦にとって初の女の子であり、男兄弟の真ん中として育ったため、親からも兄たちからもとても可愛がられていたという。

1944年、フサ子さんが満15歳の時に、硫黄島に住む女性全員と16歳未満・60歳以上の男性を対象に、引揚命令が発せられた。軍属としての残留を命じられ

たフサ子さんの兄2人を硫黄島に残し、一家は父島を経由して、本土へ疎開した。都内各地を転々とした後、江戸川区平井にて東京大空襲に遭い、硫黄島から持参した荷物の大部分を焼失している。その後、硫黄島民の集団入植団のメンバーとして、一家で栃木県那須町に移住した。

フサ子さんは那須の地にて夫の川島恒夫さんと出会い、結婚した後に千葉県船橋市へ移住。麻子と恵美子の2人の子宝に恵まれる。2021年12月現在、孫5人、曾孫8人がいる。

以下、インタビュー本文を掲載する。主な語り手は川島フサ子さん、主な聴き手は、本稿の著者でもある、羽切朋子(フサ子さんの孫)と羽切学(朋子の夫)である。インタビューは、初回を2020年12月に実施し、フサ子さんへの事実確認などを2021年6月から7月にかけて実施した。

[]内は著者側による補足・解説である。語りのなかで数箇所、こんにちの基準に照らして不適切な表現がみられるが、歴史的背景を重視する観点から、本稿では特に改変を加えていない。また、川島フサ子さんに近い親族以外の詳細な個人情報に語られている箇所は、プライバシー保護の観点から、適宜削除を行ったり、個人名をイニシャルに変更したりしている。内容に関する責任はすべて、インタビューイである川島フサ子さんではなく、著者4名に帰するものである。

なお本稿は、2020年度社会学部付属研究所「一般プロジェクト」の研究成果の一部である。

主要参考文献

石原 俊『硫黄島——国策に翻弄された130年』中公新書, 2019年

石原 俊 監修／吉井信秋＋夏井坂聡子 執筆協力／徳間書店 制作協力『原色 小笠原の魂——小笠原諸島返還50周年記念誌』小笠原諸島返還50周年記念事業実行委員会, 2018年

中村栄寿＋硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報 硫黄島の人びと』創刊号, 1981年

中村栄寿＋硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報 硫黄島の人びと——戦前の硫黄島・現

- 在の硫黄島』2号, 1982年
- 中村栄寿 + 硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報』5号, 1984年
- 夏井坂聡子 著 / 石原 俊 監修『硫黄島クロニクル——島民の運命』^{さだめ}全国硫黄島島民の会, 2016年
- 小笠原協会 編『特集 小笠原』43号, 1997年
- 編『特集 小笠原』48号, 2003年
- 編『特集 小笠原』59号, 2014年
- 編『特集 小笠原』60号, 2015年
- 編『特集 小笠原』65号, 2020年
- 小笠原諸島強制疎開から50年記録誌編纂委員会 編『小笠原諸島強制疎開から50年記録誌』
小笠原諸島強制疎開から50年の集い実行委員会, 1995年
- 長田幸男『硫黄島の思い出——硫黄島墓参資料』2002年
- 都市調査会 編『硫黄島関係既存資料等収集・整理調査報告書』1982年

インタビュー記録本文

——(羽切朋子)朝ごはんは何食べてたの？

(川島フサ子)ご飯だよ [= 白米のこと]。みそ汁と野菜は自分ちで作ってたから。生のパイヤ取ってきて、ぬかみそに漬けたり [皮を剥いて、種をとって漬ける]。大根とか菜っ葉は、大根や白菜は、石がंगाら [= 石ゴロゴロ] のところに何でも作った。でかい大根あるでしょう？うちは聖護院大根と白菜だったの。それを樽に切って入れるの。

——ばあば [= フサ子さんの母] はやってたよね、こっちでも、ぬか漬けは。
うん。

——その元、種はどこで手に入れてたの？

やっぱり売ってるでしょう。お米でも、作物でも、味噌でも、醤油でも。皆 [本土から] 来るんだもん。

——それをお店に買いに行っって？

そう。学校の帰りに味噌だの、醤油だの。担いで。こんな大きな籠に紐付け

て [=頭にひっかけて]。

——学校帰りに？

これとこれを買ってきてって。元山のところに「事務所」 [=硫黄島産業株式会社が経営する事務所] ってあって。そういうお米とか。お米は [自分がおつかいで] 買ったことはないけど、俵で持って来るから。お醤油とか、お味噌とか、ばあちゃん [=フサ子さんの母] に言われて。学校の帰りに買ってくる。あんまり重いと、元山にKっていう鍛冶屋さんがいたの、事務所の裏に。そこに置いておくと、お兄さん [=フサ子さんの長兄の鬼和男] が牛車で持って帰ってきてくれるの。

——お兄さんはその頃小学生でしょう？

ちがうよ。一番上のお兄さんは学校卒業していたから。

——その頃か。じゃあ、ちゃーちゃん [=フサ子さん] が小学校の終わりのころね。

昔は尋常高等小学校って言ったの。高等科に入って、一番上のお兄さんは卒業していたね。二番目が高等[小学校] 2年くらい。私が小学生6年くらい。そっちで、あんた、真っ暗な夜に、急に引揚げ [=強制疎開] だって。大きくても、小さくても、[荷物は] 3個しか持てないって。うちの長男 [=フサ子さんの長兄の鬼和男] が、牛車に乗せてくれて、真っ暗な砂浜から。漁船だか何だか知らないよ、[船の] 地下に入れられて。どんどんどんどん入れられて。それで、一番上のお兄さん [=鬼和男] が、「妹たちのことは頼むよ！」って言ったの。それを覚えているの。真っ暗な砂浜だった。

——牛とかも食べられちゃったんだろうね？

食べられちゃったよ。それで私が引揚げのころは、うちから道路はずーっと [両側に] タマナの木が生えていて、うちまで。いっぱい俵が積んであった。戦争中 [=地上戦準備中] は、臼で玄米を搗いて、ご飯炊いて、おにぎりにして。自然の壕 [=の中にいる兵隊さん] に持って行って、食べたの。餅つく臼だよ。

——お正月はどうやってやるの？

ちゃんとやったよ。カズノコはこんな大きいすり鉢にいっぱい浸けてあって、よくつまんだよ。硫黄島〔産業〕株式会社に皆収めるでしょう、コカを。うちなんかコカイン作ってたから。砂糖は自分ちで食べる分くらいは作ってる。サトウキビも作ってた。〔硫黄島からは〕コカインを送るでしょう。内地からは、お米とか、お醤油とか、味噌とかみんな来るんだよ。お酒は自分ちのできるから。〔砂糖は〕こんな大きい釜があるんだよ。サトウキビを、ローラーみたいので絞って、つゆがタンクに、1回、2回、3回〔と移して〕、餡みたいに炊くの。うちのお父さんが。それを「とうろ鉢」っていう大きい〔器具〕に流して、砂糖になるの。

——あと、お酒でしょう？

お酒はね、大きいタンクを作って、周りをキレに囲んで。絞ったカスを、蒸すのに使ったりするでしょう。濾したカスを周りから囲って発酵させるんだよ。それがすごいお酒でね。うちも、よく兵隊さんがいっぱい外出〔＝休日〕に来てたの。南〔部落〕のね、Aさんちの近くの。原っぱの近くに、陸戦隊っていうのがいたの。そこに主計係、炊事場で一番偉い、その人が年中うちに来っていたの。艦砲射撃があった日は、今日はえらいことがあるよ〔と教えてくれて〕、SさんとOさんが2人で、犬連れてきたの。〔私が〕コカ畑の壕にいたら、今日はえらいことあるよって。お兄さん〔＝長兄・次兄〕と3人で上に登って、下に降りた瞬間にうわーって〔攻撃があった〕。タコノキがわらわら揺れて、実が落ちた。〔目立つ石があったから〕狙い撃ちされたんだと思う。アメリカが撃った弾がどこいったか。

——それで亡くなった人とかいないの？

知らない。わからない。うちは大丈夫だった。下にいたから。びっくりしたね、あの時。

——犬もいたの？

犬はOさん、Sさんちにいた。うち、家にはいなかったけど、うちに猫はいたかも。

——犬も猫も置いて行かれちゃったのかな？

うん。牛も。

——人間と荷物だけ？

人間と、荷物3つだけ。荷物もどういふふうにとってきたか、知らないよ。江戸川区平井町二丁目に住んでたの。私なんか[引揚げてきて]、そこから、色々な[大変な]ことが始まったの、経験してさ。毎日毎日、弟おぶってさ、おむつ洗って干したり、妹たちを連れて、食堂の前に並んで、ご飯なんか買ったり。藤五郎っていう弟がいたの。それは27歳で死んじゃったの。その弟が調子悪くてさ、お父さんとよく病院に行った。昔うちの近くのAさんっていうのが、軍需工場で、無線機か何かを作ってたの。その人が、お父さんとふたりで病院に連れて行くのは大変だから、うちのリヤカー使って連れていけ、って[言ってくれた]。[硫黄島民の集団入植地の]那須行ってからも、田植えから、稲刈りから、落ち葉掃きからみんなやったの、全部。

——硫黄島では、お兄さんたちがいて、やってくれたからね。

百姓なんて、子どもはやらないよ。

——お兄さんたちはしてたでしょう？

一番上のお兄さん [= 鬼和男] は、牛を大事にしてたの。面倒見てたの。

——サトウキビは作ってたんでしょう？

作ってたよ。皆親戚とか、手伝いに来てね。サトウキビを、このくらいに [= 40~50cmに] 切って、束ねて。牛車で、製造場に持ってくるの。こんなローラーみたいのにかけて、絞るのよ。その汁が溜まるようにタンクがあって。そばに大きな釜があって、3回で炊き上げるんだよ。うちのお父さん、お母さんが火を燃して。乾いたカスを燃すんだよ、釜の下から。

——子どもたちは遊んでるだけ？

小さい子は何にもしないよ。小さい子[=下の妹・弟]は何してたか知らない。私はお兄さんが2人、そして私、3人でタマナの木渡りとか、そういうのをやってたよ、一緒に。お兄さん2人と、私と、「木渡り鬼」って、タマナの木を渡って。——木登りをしてたんだ。

そう。下の弟たちとか、妹たちとかのことはあんまり覚えていない。——上と遊んだことを覚えているんだ。

うん。一番覚えているのは、私の下[の弟に]清四郎っていうのがいたの。あれがね、[自分の]学校の道具を、学校の帰り道の山に隠してきちゃったの。それで、うちのお父さんが怒ってね。正座させられて、[膝に]重し乗せられて。それを、次男坊のお兄さん[=鬼志男]と、私が謝って。今のランタンっていうのかな、それ持って、夜に探しに、取りに行ったんだよ、弟を連れて。置いてあるところ、知ってるんだから。私とお兄さんと3人で。うちのお父さんは厳しかったよ。そういうこともあったし、礼儀作法も、教えてくれたし。「履



物を脱いだらこういう風にしろ」 [=揃えろ] ってちゃんと教えてくれたし。昔は電気ないからね。飛行場の方は電気あったよ。だけど、一般の民家はないから。——どうしてたの？

ランプだよ。石油ランプ。

——石油は買いに行くの？

[硫黄島産業株式会社の] 事務所ってところに、皆売ってるんだよ。

——家に何個あったの？ 1個じゃ足りないでしょう？

ご飯食べる場所 [=台所] にあったよ。その他に、持って歩く [用] のがあるから。

—— [集団入植地の] 那須の開拓も、ランプだったの？

そうだよ、昔は。那須の、田代のところも電気ないよ。[地元の] 百姓は田んぼ持ってて、すごかったけど、電気は全然なかったの。開拓が入ってから、やっとあの辺の部落も、電気入れてやったの。

——那須は水はあったでしょう？

(川島恒夫：フサ子の夫) 井戸だよ。

——硫黄島は井戸じゃないもんね。

井戸じゃない。地下に掘って、コンクリ塗って。

——溜池だよ。うちの、残っているよね。あの、岩のところから……。

上の、ものすごく大きい岩だったよ。そこにセメント塗って、雨が降るとちゃんと、台所にタンクあったでしょう、埋まってたけど。あそこにちゃんといっぱいになると、庭の貯水池に行くのよ。

——そうだったの？ それでタンクにメダカを入れてたんでしょう？

うん。メダカ。

——山下賢二さん [=山下賢二・全国硫黄島島民の会名誉会長] は、「だっぼみ」って呼んでたよ。メダカじゃなくて。それが生きていれば、飲めるんだよね。うちはメダカって言ってたけど。

—そのメダカは売ってたのかな？

知らない。けどどいたよ、こんなバケツみたいなので、汲んで。自分たちでヒュッてやって汲んで。

—メダカも汲んじゃうんじゃないの？

入ってないよ。メダカそんないっぱい入れてないもん。[井戸の設備は]皆自分ちで作ってるんだよ。雨がいったい降った時は、杓で汲めるくらい[上の方まで水が来ている] ことあるよ。うちはおばあちゃんち用のが1つと、うちの庭に1つと、[隣家の]Tさんちの下りたところに1つ。2つ並んでいたでしょう。両方使えたの。

—それで洗濯もして。洗濯板でしょう？

うん。石鹸使って。私はやらない。お母さんがやっていた。私にはやらせなかったね。洗濯したり、掃除したり。私はあれやれ、これやれって言われなかった。

—料理は？

料理もやらせないよ。

—ばあば [=フサ子さんの母] 好きだったもんね、色々やるの……

うちのばあちゃん [=母] は、昔の人はすごいよね、9人も産んで育てたんだもんね。おやつもちゃんと作ってくれたよ。何だか知らないけどね、これくらいの、フワフワした、何を揚げたんだろう？ よく覚えていないけどね、油で揚げたもの。それとか、ご飯の残ったものを干しておいて、それを揚げてくれたり。いちばん覚えてるのは、隠居所におじいちゃんがいたの、ちょっと足が悪くて。お供えものを崩したものを、干してあるの。吊るしてあったそれを下ろして、揚げて砂糖くるんで、私を呼んで、私にいちばん多くくれたの。おじいちゃん、おばあちゃんに可愛がられたの。私が隠居所行って。おじいちゃん、酒飲みだから。テーブルいっばいに酒が置いてあって、それを私がきれいに片づけて、おじいちゃんを着替えさせて、布団引いてあげて、それで寝かせたの。だからね、私のことは可愛がってくれたよ、おじいちゃんもおばあちゃ

んも。お父さんがそういうことを教えてくれたの。

(川島恒夫)じいちゃんは、荒井多作さんだよ。

——多作さんは後ろに住んでんだよね？ 岩の上の方ね。

ちがう。岩のね、前だけど、うちの庭の横の方。

——そう、お正月は初詣は行ったの？

初詣なんか行かないよ。硫黄島神社はあるけどね。今のところと違うよ。でも、硫黄島神社のお祭りってあった。

——夏に？

お祭りあって、お相撲とるところもあって。お相撲さんって言う人がいて、沖山さんって言うんだけどね。相撲さん、相撲さんって言ったら、行司のこと、行司屋さん。立派な廻し締めて、若い青年団が。でっかいお祭りがあるんだよ。行ったね。

——屋台みたいのはないんでしょう？

そんなのないよ(笑) Mさんって人が、太鼓叩く人がいて。夏だよ。うちのおばあちゃん [=フサ子さんの母] が、1番下の弟が生まれた時かな、鳥居はくぐらないで、脇から入れって言われて、私も脇から入ったの。お祭りの時、神社までの道の両側に、ずーっと [飾り付けがある]。学校で、絵を書いたり、行灯を作ったりした。それに蠟燭つけて、いっぱい並べて、すごいよ、硫黄島のお祭り。神社入る手前に運動場があるの。そこで運動会なんかもやるの。運動会でも、いっぱい飾りを皆で作って。

——いまの硫黄島神社の場所じゃないんだよね。

今の硫黄島神社の場所は低いじゃん？ 昔の硫黄島神社は、鳥居くぐって、相撲場のところがあって、その先がまだ高くなって、神様飾ってあったの。

——なんで移動しちゃったんだろうね？

わからなかったんでしょ、終戦後は。皆ほら、島の形が変わってるでしょ？ うちの方にあった木だって、[今は] タマナの木だってなくなっちゃった

もんね、こんな小さい。硫黄島に行った時に、持って帰ってきたけど、やっぱり枯れちゃった。育たなかった。パパイヤとか、パイナップルも育てたよね。——パイナップルは自生してたんでしょ？

パイナップルは頭切るでしょう？ それを投げとく [= 植えとく] とくっついちゃうもん。

——簡単にできちゃうんだ(笑) 最近はなくなっちゃったでしょう。そんな簡単にできるのに。

なくなっちゃった。唐辛子もなくなっちゃった。

——唐辛子は自生してたの？

うちはサトウキビ畑にあったけどね。朝鮮の人たち [= 徴用または官斡旋で動員された朝鮮人軍夫] がいっぱい来ていたでしょう、飛行場の方に働きに。「唐辛子ください」なんて来たよ。うちのお父さんが「あそこにあるよ」って教えてあげて、とらせて。

——唐辛子は食べてなかったの？

私は食べてないよ！

——あれだけあるから、好きな人は食べていたんじゃないかな？

うちは食べてなかったよ。ぬか味噌とか、そういうのに入れていたよね。ぬか床に。虫がわからないように、入れていたんじゃない？ でも、ぬか味噌なんてかき回したりしないもん、私。大根とか、白菜とか切っただけで、あとはやったことないよ。

——毎日かきまぜなきゃいけないからね。

うちのばあちゃん [= フサ子さんの母] は毎日やってたよ。

——森田 [旧姓：高橋] いつほさんが、よく言ってたのは、硫黄島は地熱があるから、お芋をふかして食べていたって。チャーちゃん [= フサ子さん] もやってたの？

千鳥 [部落] っていって、飛行場の方に、噴火草っていうのがあって、地熱が

あるんだよ。そこへお芋のツルを地面に差しとくんだよ。そうすると、いいお芋ができるんだよ。それを収穫に行って、[地熱の出ているところに] 収穫したお芋を置いて、草かけて、上から土かけて。それで暫くして行くと、ちょうどいい具合に蒸けてるの。[そのやり方は] そこに行った時だからそうしたんだよ。家では、四角い枠の、鉄の[聴き取り困難]がはまってて。それを竈の上に乗せて、中にお芋をいっぱい入れて、下に消し炭が入れてあって、いつでも食べられるようになってるの。

——いつでもお芋があったの？

お芋の時期はね。でね、その他に、うちのばあちゃん [=フサ子さんの母] はおやつを作ったり。お米の残ったのを干しておいて、油で揚げて、砂糖で絡めて、黒砂糖。

——いいお砂糖だよな。

真っ黒だったよ。物置のこんな大きい樽に入ってたの。普通、欠けないよ。だから金槌か何かで割って食べてたの。そうだよ、お塩だって、地熱で、塩炊き場ってところがあって。そこに塩八さんって人がいて、塩専門の。そこへ、ね、かます [=塩一俵] を買いに行って、樽の上に乗せて。にがりっていうのが出るんだよ。それを豆腐屋さん持って行って。豆腐屋さんのおばさん知っているから。うちのお父さんが [にがり] を持って行ってあげて。おからもらったりね。塩は海水から作ってたんだよ。

——どの辺にあったの？ その塩作ってるところ。

わからないかも知れないけど、塩八さん。東 [海岸] からさ、少し北の方。海だよ。すぐ海だもん。北 [海岸] じゃなくて、あれはなんて言うんだらう。あそこも東 [海岸] になるのかもわからない。

——訪島事業 [=原則として毎夏行われる小笠原村主催の島民墓参] で、船で島をぐるっと周って帰る時、東の方って地熱が高くて煙が出ているじゃん？
うん。

—あそこらへんに温泉みたいなのがあったって、言ってなかった？

ああ、自衛隊の人がね。あたしは、そんな温泉に入ることはなかったけど。うちの法子 [=フサ子さんの妹] が、汗疹みたいなのが、額の脇にできちゃったの。小さい時に。で、おばあちゃん [=フサ子さんの母] が遠山海岸ってところに連れて行って。そこは地熱が出てるんだよ。それで、その蒸気を「患部にあてて」こうやってやって。よく私も一緒に行ったけど。

(川島恒夫)遠山海岸は、俺らも1回行ったんだよな。

行ったよ。それで、あそこに行ったじゃない。観音様が飾ってあって。

(川島恒夫)あれから1回も行かせてくれないんだよな。

行かせてくれない。

—そこに皮膚病を治すので行ってたんだ。

地熱が、湧いてきていたんだよ。硫黄かな、温泉みたいなもんだよね。それで、法子 [=フサ子さんの妹] ずっと通ってたんだよ、おばあちゃん [=フサ子さんの母] と。昔は、裸足で遊ぶのも多かったけど、「タコっぱ草履」って言って。今、タコノキがあるでしょう？ あれと違う [種類の] タコノキがあったの。それ用のタコノキ。その葉っぱで草履を作って、鼻緒もちゃんとつけて。

—なんか、作るのがうまい人がいたって言ってたよね。

うちの方で、Mさんってうちがあって、その「おふくおばさん」って、おばあちゃんが作ってくれたの。タコっぱ草履。

—それを買うの？

タダだよ！だって、タコの葉は [タダ]。うちにもあったよ。遠山海岸行くところにあった。それを取って、きれいに洗って、干して渡して作ってもらう。

—それ履いて木登りしたりしてたの？

履かないよ、裸足。うん。

—服もワンピースだったって言ってたよね。ワンピースで木登りもしてたの？

ワンピースだよ。[兄2人と] 3人で遊んだ記憶はある。下の子と遊んだ記憶はないんだよ。ただね、サトウキビ、お酒にするキビとか、甘くて太くて、おいしいキビとか、皮をむいて、かじるの。そういうのお兄さんがさ、硫黄島産業株式会社のサトウキビ畑が、うちのすぐ向こう側にあるの、そこから取ってきて、よくかじったり。藤五郎 [=フサ子さんの弟] が小さい時、一番上のお兄さん [=鬼和男] が背負ってて。赤ちゃんの時、覚えてるの。3人でサトウキビをかじってたの、タマナの木の下で。藤五郎が [サトウキビを] 「切って」っておぶってたお兄さんに言って、[藤五郎の] ヒトフシ指を切っちゃって、うちのお父さんが急いで指を押さえて。

——人差し指のこと？

サトウキビを持って「切って」ってお兄さんに言ったみたい。その時、指も一緒に切っちゃったんだよ。元山に、病院がひとつしかなかったんだけど、そこに連れて行ったんだけど、付かなかったから、切っちゃったらしい。

——なかったんだ、先っぽ……

(川島恒夫)なかったよな。

うちのお兄さん [=鬼和男] はすごく、気にしてたよ。自分がおぶってたからね。

——前に、タピオカがあったって言ってたよね？

武将豆？

——豆じゃなくて、でんぷんの塊みたいな……

あれは、南洋さつまいもじゃないの？ 木だよ。木の根元から取れるんだよ。木になるんだよ。それを取って、芋みたいなの、それを取って洗って、乾燥させて、栗みたいにしたの。

——それがタピオカみたいなものなの？ お菓子みたいなものがあったの？

サトウキビはよくかじったね。毎日毎日、サトウキビかじってたの。でも、虫歯もなかったね。

——裸足で、虫歯もなくて、丈夫だよな。

いや、タコっぱも履いていたよ。

——学校とかに履いて行ってたんでしょう？

うん。遠足とか行く時も砂地が熱いからね。

——遠足どこに行ってたの？

東の海岸とか、南の海岸。

——何するの？

皆籠にいっぱい、お弁当持って。ごちそう作って。父兄もついてくるんだよ、遠足の時。東の海岸でお昼食べたら、南の海岸まで歩いて。摺鉢山の左側、今はないけど、岩石みたいなのがいっぱいあったんだよ、がんがら。うちのお父さん、そこからよくサザエを取ってきてくれた。大きい、重い玉石みたいなのがいっぱいあったのに。

——南〔海岸〕は〔米軍に〕上陸されたところだからね。

上陸された時には、きれいに岩がなくなってたよ。

——どこいっちゃったんだらうね？

どこいっちゃったんだか、知らないけど。

——あんなに簡単に上陸できるような感じじゃなかったんだよね、南海岸は……。

地雷もいっぱい埋めてあったんだと思うよ。占領するのに何日間でもできるって言ってたのに、1ヶ月もかかったんだから。うちの方の海岸は、岩場で、波が高く、自由の上陸できないところだから。そこまでも行くの大変だけだね、うちからね。レモン草畑通って、下りて、また上って、岩がいっぱいあるところ。だからそこは泳げないよ、東の海岸しか。

——そこに遠足に行ってたんだ。

遠足でも運動会もすごいよ。うちの長男〔=鬼和男〕と、私、いつも賞を貰ってたよ。100メートルとかさ。

——玉入れとかもやったの？

やった，赤白でね。あと騎馬戦。うちのお兄さんたち。私らはやらないよ。

——赤白に分かれて？

そう。赤白分かれてやるんだよ。

——ピストルもあったの？

あったよ。旗も飾ってあったよ。みんな子どもらが一生懸命作るんだよ。ネムの木って，昔はギンコウカイって言ってた木。あれ，運動会の前に1本ずつ持っていくの，学校へ。それを入っちゃだめなとこに杭にして，打って。綱ひいちゃう [囲いを作る]。見物人はそこより外で見るの。

——今と一緒だね。村中の人が見に来るんでしょ？

そう。私なんかも，リレーもしたことがあるよ。あ，私はマラソンだ，私は。学校の校庭から，飛行場まで。

——それは運動会の競技なの？

それは違う，別。マラソンもあった。新美先生の時だった，私の先生。その先生がマラソンさせて。私は同級生，多くて29人でマラソンしたの。途中で射撃場っていうのがあるの。そこでうちのお父さん，石の細工するの，できたから。そこで，「おい！がんばれ！」って私に気合を入れるの。女子で2位だったの。(川島恒夫)みんな裸足か？

うん。

——裸足で走ったの？

道路だから。岩なんかない。私の同級生だけだよ，マラソンやったの，新美先生だけだよ，100メートル走とか。

——靴履いてる子はいなかったの？

入学式とかの時はね。昔はね，うちのお父さんがね，メリンスっていう袴をくれたの。それが2着あったよ，私の [上は緋の着物だったがメリンスの袴]。セーラー服もあった。うちのお父さんはね，私が男 [=兄] と男 [=弟] の間

でしょう？ [だからかわいがられた。] 芝園丸，2か月に1度船 [= 定期船] が来るでしょう。お父さんがその船長さんに頼んで，セーラー服から，帽子から，ランドセルから，靴から全部，私持っていたよ。それで学校行かせてくれて。普段は履かないよ。裸足か，タコっぱか，下駄。

—下駄も履いてたの？ 南海岸から東海岸の遠足とか。どのくらいかかるの？

時間はちょっと覚えていないけど。でも，それが島の人の楽しみだよ。運動会とか，遠足とかね。

—みんな来るんだもんね。山下賢二さんなんかは，遠足ですき焼きやったって言ってたからね。お弁当がすき焼きだったのかね？

知らないけど(笑) あのうちは漁師だから。お父さんが。うちは百姓。でも，うちのお父さんは石の技術を持っていたから。お墓の石を作ったり，垣根の石，積むのを作ったり。

—見つかった墓石は？

石屋さんがいて，皆手伝ってるんだと思う。うちには，硫黄島にはお墓はないから，水口家は。島民墓地はあった。大坂山を下って，左に入ったところ。だから，お盆になるとすごいよ，自分ちの墓なくなっていくよ，島民墓地に，籠にいっぱいお供え持って。

—何しに行くの？

お墓で供養するのよ。誰か，親戚のお墓があるから。うち親戚は，金澤っていうおじさんが亡くなったからね。ちゃんといっぱいご馳走持ったり，スイカ持ったりして行くよ，みんなでご供養して。

—お酒飲んだり？

うちのお父さんはお酒一滴も飲めない。よく覚えてないけどね，行った記憶はあるの。金澤のおじさんが死んだ時，4人で棺担いで，うちのおばあちゃん [= フサ子さんの母] が団扇太鼓を鳴らしながら。北 [部落] から，西 [部落]

のお墓まで行ったの覚えているよ。

——土葬？

土葬だよ。でもさ、火葬するところはあったよ。[金澤家の] お墓の下にあったよ。石が積んであって、薪で燃して。でも、そういうのは向こう [=硫黄島] で生まれ育った人じゃなくて、何か [の理由] で [硫黄島に] 来て亡くなった人だけじゃないの？ 硫黄島で生まれ育った人は棺のまま [埋めるんだよ]。寝棺だよ、座り棺じゃないよ。[集団入植地の] 那須行ってはじめて、座り棺って見たけどね。棺作るころはあったんだろうね、大工さんだか、誰が作ってるんだか知らないけど。4人で担ぐんだよ。北 [部落] から西 [部落] まで結構長かったよ、あんまりよく覚えてないけどね。私と近い年くらいの女の子が、バケツか、樽に水が張ってあって。そこに顔入れて死んじやったんだって。東 [部落] の人だけだね。棺担いで、東の道に行くのに、直接見ていたら悪いからって、木の陰から私の母親が見てたの。

——若い子が亡くなっちゃうとね [悲しい] ……

私が、7歳かそれくらいの時。

(川島恒夫)昔は数えの8歳が入学だから。生まれた年は1歳だから。

木の陰に隠れていたね。どうして亡くなったのかと思っていたら、ばあちゃん [=フサ子さんの母] が教えてくれたの。[危ないから] 私が生まれてから庭を這わせないようにしていたって、母親がよく言っていた。

(川島恒夫)水槽は高かったっけ？ 段差がなかったのによく落ちなかったなー……

屋根があって、水汲み口は1か所高くなってるの。周りにも屋根がついてるの。——あの家のタンクの上に、屋根があって、水汲める場所だけ高くなって [落ちないように] なんだって。

[屋根の上に] 石もやっていたよ。蓋してあるところもあるよね。頑丈だったんだろうね。布団も干してた。

——子どもが落ちないように。乗っても壊れないようにしっかりした屋根だったろうね。

そういう設備はちゃんとできているんじゃないの？

——水が重要な島だもんね。

雨降るのが何よりの一番の「喜び」。雨降らないと、水がなくなっちゃうもんね。

——お風呂とかも入れなくなっちゃう？

そう。だから、うちは親戚のうちの、コカ畑の中に、コンクリで作った蓋なかったけど、池みたいなのあったの。そこに水貯めていたの。そこに、砂糖釜かなんか持って行って、風呂入ったり。

——水風呂？

夏だもん。私は雪も知らなきゃ、セーターも知らない。お米がなる木も知らなかったよ。稲、見たことない、田んぼもない。木村校長っていうのが都会、東京から来たの。その先生が、お米のなる木 [=稲] を持ってきてくれて「これがお米になるんだよ」って [見せてくれた]。

——その木村校長が、バスケットゴールを持ってきてくれた人でしょ？

そうそう、それまでなかったの。篠崎先生っていうのは、校長ではない。玉置先生とか。安宅校長っていうのは、昔から家族で住んでた。奥さんのちよ先生って言って、私、1年生の時に教わった。安宅ちよ先生に、ミシンなんかも教わったの。篠崎先生には教わったことない。安宅校長にはそろばんを教わった。ちよ先生は1年生で入学してからお世話になって、5、6年の時、裁縫っていうの？ブラウスなんかも作ったよ、ミシンで。着物とかそういう和装は、山本ハツネ先生に教わった。染物も自分でやったよ。生地染めるの。染粉が売ってたの。絞りにするには、花模様かなんか糸かなんかで縫って、絞っておくの、それを染粉に入れるの。そうすると、そこだけ花の形のように染まるの。そういうのを学校で教わったの。それをうちで、自分でやったの。戦争中だから、

羽織とか、着物とか壊して、モンペっていうのを作ったの、戦時中だから。今のこういうズボンに、紐がついてるやつだよ。型紙とってね。うちのお父さんに、「そういうことが好きなら、お前にはそういう学校に行かせてやる」なんて言われていたの。そうしたら戦争であんなになっちゃったでしょう？

——ミシンはあったの？

うちにはない、学校。

——結構、裁縫やっていた人多いんだよね。怜馬君 [= 西村怜馬・全国硫黄島民3世の会長]ちのおばあちゃんも、東京に出ていたって、裁縫の学校で。私も、学校行かせてやるって、お父さんが言ってくれてただけど、戦争で引揚げになっちゃって。だから那須 [の集団入植地] に来てからね、小笠原は東京の管轄でしょう？ だから東京都から、軍服のお下がりとかね、軍隊の靴とかを結構もらったの。それを縫ったりして使った、靴も履いた。リュックサック背負って、那須に配給取りに行ったよ。軍隊の払い下げね、自分で、直してね。うちのばあちゃん [= フサ子さんの母方の祖母：ハル] がさ、繕いものとか、結構やってたよ、荒井のおばあちゃんが。うちのお母さんは子ども育てるのが大変でしょう？ 9人も産んだんだから。食べ物 [= 料理] とか、上手だったよ。でも、お針は、荒井のおばあちゃん [が上手だった]。私が [裁縫] するのを見て、「お前はどこで習ってきたの？」なんて言われた。(川島恒夫)お寺はあるのか？

できたんだよ。青木さんって人が建てたんだよ、お寺は。学校からまっすぐ行くと、十字路みたいのがあるんだよ、そこを右にあったんだよ。[硫黄島産業株式会社内にあり、住職も呼んでいた] 昔とは違うよ。戦争 [= 対米英戦] が始まった頃だよ、真珠湾攻撃があったでしょ？ その時、元山で提灯行列したんだもん、覚えているよ。私の帰り道、学校からまっすぐ行って、十字路の右、入ったところにお寺があって。青木さんが作ったの、お釈迦様をね。

——どこから持ってきたんだろうね。

〔お寺の〕庭にちゃんとあったの。荒井のばあちゃん [=フサ子さんの祖母・ハル] は、日蓮宗の信者だったの。身延山に行った時の写真もどこかにあるよ。だから〔硫黄島の〕お寺に行く時はいつも私が連れていかれたの。大太鼓に合わせてお経を唱える、団扇太鼓、覚えてる、お釈迦さまも。学校に行ってる時はお寺に手紙なんか届くと、役場からあずかって帰り道にお寺に持って行ったの。

——郵便配達員はなかったの？

私が学校に行くようになって、途中で郵便局ができて。そこにT君が、私の同級生で勤めてたの。私は学校卒業して、あくる日から飛行場の方に〔勤めに〕行ってしまったから。海軍施設部ってところで。

——それは〔勤め先を〕決められちゃうの？

その頃、私は徴用でどこかに持っていかれちゃうって、噂があって。うちのお父さんが、徴用で持っていかれたら困るって。鍛冶屋のKの家に空き家があっ



たの、新しい家だったけどね。そこを、海軍施設部の事務所にして、偉い人を住ませたの。その家に頼んで働かせてもらえるようになった。トラックなんか出入りしてたから、どんどん飛行場を作ってたからね。その[トラックに]「車に乗ってけ！」なんて言われて、乗せてくれたりで行っていた。

——それまで郵便局がなかったってことは、役場に手紙が届いていたの？

違う、[硫黄島産業株式会社が経営する]事務所。元山[部落]の坂があって、登っていくとヤシの木が1本植えてあって、そこに事務所があったの。そこに[村の人が集まって]名前呼んで、投げるの[手紙を]。ヤシの木の周りに、人がいっぱい集まるの。なんでも事務所で[事業をやっていた]。私が学校卒業してから、郵便局ができたの。

——T君が働いていたんだよね？

自転車で配達していたみたいだよ。

——自転車はあったんだ？

自転車はあるよ。うちだって自転車あったよ。うちの前の坂の、上の方まで持って行って、三角乗りしたんだよ。よくお父さんに怒られたよ。怪我したらどうするんだよって。

——1台あったの？

うん。よく自分で乗ってたよ。

(川島恒夫)パンクしなかったのか？

パンクしたって、自分たちで直せたよ。パンク直す薬もあったよ。

——なんで自転車はあったの？

買ったんでしょね。

——お兄さんたちも乗ってたの？

覚えていない。自分で乗って、お父さんに怒られた記憶しかない。

(川島恒夫)各家にあったのか？

そうねえ。そのうちによって、ないうちもあるだろうけどね。元山[部落]っ

てところに、結局、お菓子屋もあれば、瀬戸物屋もあれば。味噌、醤油、薪も、石油も、鍛冶屋も。床屋も1軒あった。

——支払いはずけでしょう？

そう。コカを[納めていたから]。漁師もいれば。百姓もいるし。サトウキビ収めたり。コカを納めたり。

——お菓子屋には行ったの？

行ったよ。1銭持っていけば、飴玉でもなんでも買えたもん。自分で、学校の帰りに寄ったり。家から学校まで結構[距離が]あったよ。学校の門の前に、広い空き地があって、真正面に役場があって、道が二股に分かれていて、右に行くとすぐ病院があるの。そこを歩いて、うちに帰るの。

(川島恒夫)学校とか、広場の跡は、今どうなってるの？

何にもないよ。[木が茂って]森になっちゃってるよ。学校の跡なんてない。[戦後]1番最初行った時、硫黄島神社の鳥居の鉄骨だけ残ってた。硫黄島神社、こんなになっちゃった、と思って見ていたの。まわりに[木が]生い茂っちゃってね。

——せっかく[鉄骨]残っていたなら、元の硫黄島神社の場所に再建すればよかったのにね。

うん、自衛隊が[別の場所での再建を]やったんでしょう？

——船見岩は行ったことあるの？

年中行ってたよ！ 水平線に船が見えるの。そうしたら、船が来たって半鐘鳴らすの。あの石[=岩]低くなっちゃったの。昔はもうちょっと高かった。

——昔は、島自体も低かったから、もうちょっと見渡せた、って言うもんね。

うん。もっと平らだった。だんだんだんだん[隆起で]島が大きくなってたの。

——船見岩の周りの、硫黄がぐつぐつしているところはあったんでしょう？

うん。カーカー言ってる場所[=硫黄ヶ丘にある熱湯が沸いているところ]

は、あそこでレモン草を蒸かしてたの。香水の材料なんだってね、蒸かして、汁を「原料にする」。カスは畑かなんかの、たい肥になってたみたいだよ、うちはもらってなかったけどね。

——レモン草は自生してたのかしら？

あれは植えるんだよ。

——今、島にあるのはその頃の残りが、自生してるんだね？

そうだよ。レモン草の製造をしていたところにも、うちの親戚のお兄さんいたもん。[船見岩の]上はすごい涼しかったみたいよ。下は蒸かし。今、カーカー言ってるところがレモン草蒸かしてたところだよ。それから、ここに運動場があって、ここにレモン草の工場があって、ここに北へ行く道があって、これが神社入る道があって、こっちに東に行く道があって。

——船見岩の近くのジャングルになってるところが、元山「部落」って、今ではわからないよね？

わからない。

——ちゃーちゃん [=フサ子さん] は、男兄弟のあいだの女の子だから、かわいがられていたから、硫黄島時代が良かった、はずだよな？

うん、そう。

——16歳くらいまで硫黄島にいて、楽しい時期だよな。

飛行場に勤めに行っても、皆可愛がってくれたしさ。食堂にいた人、うちの親戚のお姉さんと結婚してる人だったの。料理長。「おまえ、[勤めに] 来ているのか。お弁当持ってこなくていいから、食堂来て食べろ」って言ってきて。それから食堂で食べさせてもらった。

——お弁当はだれが作ってたの？

おばあちゃん [=フサ子さんの母]。

——食堂で、ただで食べさせてもらえるようになったの？

うん。食堂があったの。

——働いてからも、戦争が近づいてたけど、そんなの関係なく、楽しかったんだね。空襲もまだなかったし、飛行機が荷物 [= 物資] を運んでくるくらいだったから。貨物の飛行機と、軍艦で運んでるくらいで、その頃はまだ良かったの。ひどくなったのはね、この飛行場から硫黄島神社の近くに事務所が移ってからだよ。「危ないからこっち来てください」って迎えに来たの。[そのころは] 月給50円だった。

——何に使ってたの？

何に使うって、親に渡すしかないでしょう、着るものとか買ってくれるもん。親がちゃんと買ってくれた。

——働きに行ってたからも？

うん。

——洋服屋もあったんでしょう？

売ってるのよ、生地とか。生地なんかはさ、買ってくると、うちの下に沖縄の人が住んでたの、お姉さんがね。すごい [服作るのが] 上手な人。洋服なんか作ってくれた。

——沖縄から硫黄島に渡ったんだね？

そこのお姉さんはね、生地持ってくと洋服なんか作ってくれるの。

——摺鉢山に遠足とか行ってたんでしょ？

私は行かない。お父さんとは下まで行ったけどね。摺鉢山のところに、Kさんといううちがあった。元山 [部落] で料理屋やってる人が、土地持ってた。その料理屋、私も1回お母さんと行ったことある。[摺鉢山の] 上には人は住んでない。下には砂糖工場があった。サトウキビ作ってた。料理屋の旦那が、うちの防空壕に避難してきたことあった。

(川島恒夫)病院はあったんだろう？

学校を出ると、Y字路になって、右に行くと役場の並びにあったの、診療所。そこで昔、目の病気で「トラホーム」って行って、年中学校の帰りに、診療所

寄って、[目を]薬で洗ってもらってたの。昔から私、目が弱かったの。

—その代金は払わなくていいの？

うん。

—それもツケ？ 保険証は？

うん、あの頃は保険証なんてないよ。うちはね、おばあちゃん、荒井のおばあちゃんがみな、へその緒とか、産湯から全部おばあちゃんがやった。それを私は見てたよ。荒井のおばあちゃんは、結構とりあげ婆ちゃん [=産婆] やってたよ、頼まれればね。

—鶏をしめてたんだよね？

荒井のおばあちゃんがやっていた。でも、子どもには見せないよね。うちにシャモって言うかっこいいの、強くて、オスで。ナツナツと庭歩いてたの。うちのものには絶対何もしないけど、他所の人が来た時に何かやったらしい。そして、うちのお父さんが殺したらしい。だけど殺すところは見せないよ。いないから「どうしたの？」って言ったら、「殺した」って。

—食べちゃったんだね？

知らない。全然知らない。

—豚肉はおいしかったって言ってたよね。

うん。でも、やっぱり殺す時は子どもには見せないよね。あのさ、肉は肉でやるでしょ。皮は1回、油をとるんだよ、油が出るから。その揚げカスも、ネギなんかと炒めるとすごくおいしいんだよ。そういうのは食べたことある。牛肉も。軍隊が入ってからだよ、屠殺場っていうのができたんだよ。その係の人以外は絶対に殺しちゃいけない。戦争中ね、西行く道にね、Tさん [という屠畜専門の人がいた]。

—その牛はどこから？

島の牛だと思う。

—それまでは牛肉は食べたことない？

牛肉なんて、食べたことない。うちのお兄さんは丑年だし、自分が牛の世話していたから、絶対に牛肉なんて買ってこないもんね。軍に頼まれて納めたり[していたみたい]。「はいごう」っていう[名前の]牛がいて。すごい[立派な]牛。ある時、ヤシ山っていうところが北[部落]の方にあるの。ヤシの木がいっぱいあって、ものすごく生い茂ってるところ。そこに牛をつないで、草刈りをしてたんだって。牛に食べさせる草を[取ってた]、ヤシ山の中に入って。そうしたら、変なおいがしてきたんだって。それで、お兄さんと友達2人で、急いで出てきたんだって。そうしたら、「はいごう」が死んでたんだって。で、北[部落]にTおばさんっていうのが住んでたから、そこに行って、「はいごうが死んじゃった」って、[お兄さんが]泣いていたって。

——なんで死んじゃったの？

だから、ガスが、海の方で爆発して、ガス上がってきたんじゃないの？それで牛が死んじゃったの。広がればそうじゃないけど、風の具合で[かたまって]上がってきたんじゃないの？

——かわいがってた牛でしょう？お兄さんしか操れなかった？

こわい牛だった。「そばいっちゃだめだよ」って言われてたの。

——すべての生と死が近いよね、昔は……。

今はさ、葬儀場とかあるでしょ。[硫黄島では]自分ちでお坊さん頼むとかしかないもんね。島だから、[葬祭]ちゃんとやったよ。運動会とかちゃんとやったよ。お正月も、ちゃんと着物、羽織着て。若い人も、羽根突きやってね。凧あげは、自分ちでもやったよ。自分ちは、上に白いコンクリ打った岩があったでしょう、そこであげて。今度は下の洗濯もの干す、物干しの柱があるでしょう、そこに結わいて、ご飯食べながら見てるの。ブンブン唸ってるんだよ。うちのお兄さんなんかさ、年末になると、マニラの葉っぱを取ってきて、棘のないやつ、あるでしょう、マニラの。下水みたいないところがあるの、台所で使った水とかが流れてくるところ、そこにみんな敷いておいて。そうすると葉っぱの色

が変わって。それを「葉っぱの表面を」鎌で上の方を取っちゃって。そうするときれいな繊維があるの。それをきれいに洗って、干して。「糸を繕る」タコ糸を作るの。「糸は」マニラの葉からね。凧は、元山の、Kおじさんが、2枚張りとか3枚張りとか、4枚張りとか。ちゃんと和紙、半紙みたいになってるの「で作ってくれる」。為朝の絵を描いてくれて、ちゃんと染めてくれて、糸も付けてくれる。

(川島恒夫)竹はあったのか？

篠竹があったんだよ、そう。うちの場合は、Kのおじさんが作ってくれた。うなり [=凧の両上端に付ける和紙のこと。付けると風で唸るようになる] も付けてくれるんだよ、だからブンブンブン唸ってるんだよ。風で飛ばされることもあるよ、糸が切れて。

(川島恒夫)硫黄島は「島民が」戻れなかったから。全然、語る人もいなくなっちゃったから……

お米もどこで作られているか、知らないで食べてたんだから。玄米で来る、俵で来るんだよ。精米所もあるんだよ、元山に。戦争中は、俵で配給になって、「だから」臼で搗いて。戦争前は精米所もあった。いっぱい俵で積んで残してきたから。全部、軍隊に食べられちゃったんだと思う。

——来年 [=2021年] は「コロナ禍が明けて墓参が再開見込みなので」硫黄島がんばって行けるように行こうって……。

ただね、行ったら帰ってきたくないよ。